

起死回生の思いを込めて開発したランニング足袋「KINEYA MUTEKI」。ソールにクッションなどの保護材料は使用せず、ゴム底の薄さはたった5mm。限りなく裸足感覚に近づけた(写真提供 きねや足袋株式会社)



もっぴとつ

陸王

老舗足袋屋の三代目が挑む

MUTEKI

に賭けた夢

創業八八年の老舗・きねや足袋。その三代目社長である中澤貴之さんは、市場の縮小が進む足袋業界に新風を吹き込んだ。伝統の製造技術を活かした、「裸足感覚」のランニングシューズで注目を浴びているのだ。その開発の舞台裏に迫る――。

取材・文／前原政之 写真／伊藤千晴

何をしたらいいか…… 気ばかり焦る日々

埼玉県行田市は「足袋のまち」だ。最盛期の一九三八(昭和13)年の足袋生産量は八四〇〇万足に上り、全国生産の約八割を一市で占めていたという。だが、和装で暮らす人が減るにつれ、生産は減少。かつては行田市に二〇〇社以上あったという足袋業者も、いまや七社に

減った。そのうちの一つ、きねや足袋は、二九(同4)年創業の老舗だ。和装用の白足袋、作業用の地下足袋などを手掛けてきた。

足袋市場の縮小に伴い、きねやの売り上げも九二(平成4)年ごろから右肩下がり。職人の高齢化と技術継承者の不足も深刻だった。

そうした状況を打開するため、約二五年前に先代社長(父・憲二氏/現・会長)が

行った改革が、ベトナムに工場を造り、現地で職人を育成することであった。進出は成功し、現在、きねやの地下足袋やランニング足袋はベトナムで生産している。

「ベトナムの人々は勤勉さが日本人に近く、父はそこが気に入って決めたのです。いまでは、ベトナム工場の職人たちは本社と比べても技術的に遜色ありません(中澤社長) コスト削減と技術継承者の確保は、父の代でなんとか目処がついた。それでも、日本

きねや足袋株式会社

代表取締役

なかざわたかゆき
中澤貴之

